

## 中世小城の景観・海から考える

服部, 英雄  
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

<https://hdl.handle.net/2324/20437>

---

出版情報 : 中世肥前千葉氏の足跡 : 小京都小城の源流, 2011-03-31. 佐賀県小城市教育委員会  
バージョン :  
権利関係 :

## 中世小城の景観・海から考える

服部英雄

福岡空港から鹿児島空港行きプロペラ機の右窓際に座る。佐賀平野がつきて有明海に入る直前、筑後川と六角川の河口がほとんど接しているようにみえておどろく。二つの河口は思ったよりも近い。沖合では同じ川になっているのではないか。おそらく海の生活者には常識であろう。有明海からどの川に入っていくか。前海から内陸河川には、いくつかの分岐点があった。分岐点は満潮時は海の中であり、干潮時は干潟の中にあった。それぞれの分岐の選択で進むべき河川が変わるのであった。筑後川も六角川もまた多久川・牛津川もいずれももと（根）は同じ川だという視点から考えていくべきであろう。

かりに大宰府から肥前国府に向って大量物資を運搬する場合、陸路であれば西海道をとるが、水路を行くこともできる。いずれかの場所で宝満川に船を浮かべ、川を下り、筑後川の本流にでる。引き潮にのって下り、河口沖合にて満ち潮まで待機し、満ち潮に乗って、こんどは分岐点にて別の河口（六角川と嘉瀬川の双方の河口）に入り、嘉瀬川から国府津である嘉瀬津にあがる。こうしたルートが十分想定できる。船は牛馬の何十頭分の荷物を運搬する。物資の運搬には有利であった。嘉瀬津からは人力で船を引き上げた。岸から何人かで引き上げる船曳である。それでも牛馬による搬送よりも、はるかに大量の物資が運べた。

逆もある。肥前国府に集積された租庸調は、多くが水路にて大宰府に送られた。下りの時ならば、船は肥前国庁の横から嘉瀬川を下ることができた。

九州の西部は海によってつながっていた。筑後国府・肥前国府・肥後国府は有明海と、そこに注ぐ筑後川・嘉瀬川・白川でつながり、また八代海を経て川内川で、薩摩国府につながっていた。薩摩方・鬼界が島から戻る平康頼らが嘉瀬津に到着したのは（平家物語）、こうした国府を結ぶルートであり、薩摩に漂着した鑑真が嘉瀬津に上陸したとされるのも、こうしたルートの存在があったが故である。

六角川には古代山城・おつぼ山神籠石が、菊池川にはおなじく古代山城・鞠智城が築かれた。筑後川には高良山神籠石と杷木神籠石が、八女川には女山神籠石が築かれた。巨勢川には帯隈山神籠石がある。この海へのアジア外敵侵入に備えるものだった。

杵嶋郡にあった杵嶋庄には久安四年に宋船が来着し、孔雀がやってきている。このときの杵嶋庄外港の津がどこかははっきりしないが、六角川か廻江にあっただろう。前者ならば住之江、後者ならば廻江津であろう。筑後川河口の神崎郡蒲田津は神崎庄の外港である。中国からの船もやってきた。長承二年（1133）宋船（周新船）が神崎庄に来航している。近年『中右記部類記』の記事

が紹介されて、その前年長承元年（1132）の博多において、宋人が殺害される事件があったことが判明した。博多が危険地帯になったため、危害を恐れた宋人は肥前国神崎庄にやってきた。神崎来着の背景がわかった。蒲田津対岸の三漕郡榎津は筑後国三漕庄の外港で、戦国時代のイエズス会宣教師、ロドリゲスの記録にも登場している。

日本がアジアを向くとき、この海は玄関となった。

鎌倉時代、小城郡に入部した武士団が千葉氏であった。江戸湾（東京湾）にも有明海にも大きな干満差があって、地理的に似る。江戸は元々隅田川の河口にあって繁栄していた。下総国府は市川市国府台にあったがその西を市川が流れている。千葉庄を流れていた都川あるいは花見川は大河ではないが、干満の影響は受け、肥前廻江津が良港であったように、港として栄えたことであろう。

千葉氏は鬼怒川河口の相馬御厨も拠点としていた。前海（江戸湾）とともに暮らしていた千葉氏は海の武士団であった。

鎌倉時代、肥前国小城郡に所領を得て、千葉氏も郷里の下総国千葉庄に似た地勢と考えた。江戸湾は多摩川によって武蔵府中、江戸川によって下総府中、養老川によって上総国府（市原市市原）、さらに湾よりは外に出るが、平久里川によって安房国府（旧三芳村府中）、花水川によって相模国府（大住郡）、酒匂川により国府津とも結ばれている。

千葉氏の歴代に関しては北条氏との関わりが注目できる。時胤—頼胤（一二三九～七五）—宗胤（兄）・胤宗（弟）そして胤宗の子貞胤、また宗胤の子胤貞、その子胤高、弟高胤という名乗りから、得宗・北条泰時流を烏帽子親に仰いだことがわかる。時胤（一二一八～一二四一）は北条泰時（一一八三～一二四二、執権は一二二四～）が、頼胤（一二三九～七五）は北条時頼（一二二七～六三、四六から執権）が、千葉宗胤（一二六五～九四）は北条時宗（一二五一～八四、一二六八から執権）が烏帽子親であって、それぞれ、その一字を拝領した。貞胤（胤宗子）と胤貞（宗胤子）は北条貞時が、胤高と弟高胤は北条高時が烏帽子親であろう。一字拝領は烏帽子親の一字を上につけるのがふつうで、敬意を払っていると思われるのだが、弟は一字を下につける例が実際には見られる。その意味で胤貞（一二八八～一三三六）と貞胤（一二九二～一三五二）の関係を見ると、年長である胤貞の方が貞胤よりも格下（弟相当）に扱われていたことになる。幕府はこの段階では宗胤ではなく胤宗流を嫡流扱いとした。けれどもその次の世代では宗胤流のみが高の字を使用した。胤貞は急激に反得宗色を濃くしたらしい。南朝に荷担する背景でもある。

千葉頼胤（一二三九）母は北条時房女子だった。母は泰時とは従兄妹である。

親戚であったから泰時を烏帽子親に仰ぐことは自然であった。ただ烏帽子親が歴代続けば主従制に同じである。千葉氏は御内人（北条得宗家家臣）ではないから、御家人としては北条氏とは対等であったはずだが、じっさいは主従関係にあった。

時宗の「宗」は烏帽子親の將軍宗尊親王（一二四二～七四）からの一字である。与えられた一字を再度烏帽子子に与え得たのはなぜか。一二六六年宗尊親王は將軍職から解かれていた。一二六五生まれの宗胤が十五歳（数え）になる七九年には宗尊親王はすでに逝去しており、五年が経過していた。

肥前千葉氏発給文書目録によれば、肥前に関する文書を出したことが確認できるのは宗胤からで、

宗胤二点（円通寺文書1、武雄鍋島家文書1）

胤貞七点（光勝寺文書2、中山法華経寺文書3、頂妙寺文書1）

高胤一点（中山法華経寺文書1）

胤泰六点（実相院文書2、河上神社文書3、宗像大社文書1）

胤朝二点（実相院文書1、河上神社文書1）

となっている。

鎌倉時代、小城郡に入った千葉氏はどこに拠点を置いたのか。

宗胤の父頼胤については、三岳寺文書・永仁二年十一月八日僧隆海寄進状に

「故頼胤御館御代官果（か）忍房、其後（\*割書）御乳母宗胤\*御寄進状」とある。頼胤自身が小城にいることはほとんどなく、代官が小城郡支配を行っていたらしい。ただし宗胤乳母は三寺（三岳寺）に厚い信仰を寄せていた。頼胤は肥前にゆかりの深い人物を乳母とした。宗胤の乳兄弟は肥前国の武士団だったことになる。乳母とその一族は、たとえば源頼朝の乳母寒河尼がその子小山朝光の元服に際して頼朝が烏帽子親（擬制の父親、義父）になるような関係になる。木曾義仲の乳母子今井兼平にみるように乳兄弟はとりわけ強い主従関係となる。宗胤は自身が烏帽子親で肥前の武士であった乳兄弟が烏帽子子となる関係になった。

乳母が産んだ子が、肥前武士団のなかにいたのなら、宗胤の一字、宗を与えられた可能性がある。かれが二十歳になった一二八四年、時宗は死んだ。宗の字を与えることに制約はなかった（千葉一族の通字である胤を与えることは考えにくい）。だが宗の字に関してはつぎのような問題がある。

肥前では平安期以来、肥前在庁高木氏（兵藤氏）が「宗」を通字としていた。嘉元二年（一三〇四）から延慶三年（一三一〇）にかけての宗像文書や円通寺文書、また青方文書に多久太郎宗経、多久弥太郎宗広、多久孫太郎宗種、内記

兵衛尉宗重、於保入道代宗秀ら、宗字を使用する小城郡や佐賀郡の武士が見られる。多久宗経は小城弥五郎等と並んで登場している。しかしはやく於保氏も鎌倉初期から「宗」字をよく使っているから、宗胤とは無関係だった。もし鎌倉後期のかれらが烏帽子子だったのならその母は宗胤乳母の可能性が高くなるけれど、不明である。

「千葉系図」の叙述によれば、千葉介頼胤は建治元年八月に、前年文永十一年蒙古合戦での負傷がもとで、小城にて卒去した。その子宗胤は永仁三年に死去するが、小城円通寺の開基となった。その子で建武三年に死去する胤貞は松尾山（光勝寺）の開基となる。その子で応永十三年に八十四歳で死去する胤泰が高田城に居住し、「当城鬼門」彦山権現を勧請した。その子で応永二十四年に死去する胤基は松尾城に居住した。その子で康正元年に死去する胤鎮は牛首城に居住し祇園岳と称した。祇園城のことであろう。

上記はおおむね一次史料でも裏付けられるところである。宗胤は肥前にいることもあっただろうが、もちろん鎌倉幕府の重臣として、鎌倉が主要な生活空間であった。

胤貞胤泰父子の肥前関係発給文書の数は多い。中山寺文書建武元年十二月朔日讓状で彼は嫡子胤平に千葉庄小城郡と下総の千田八幡両庄を譲っている。

初期の当主らは、はたして小城郡のどこに居住したのか、高田城とはどこなのか。また菩提寺として千葉氏が関与した三岳寺（三寺）を重視した理由は何なのだろうか。

高田城の所在地については長神田里高田が該当するという説がある。長神田里高田の日吉神社は元亨二年（一三二二）千葉胤貞の創建とされる。

しかし『佐賀県の地名』は長神田里の高田には館らしき遺構がないとして、享和元年（一八〇一）写の御領中郡村附に、「遠江ヶ里・久本ヶ里を惣名高田と称し、社ヶ里を下高田と称する」とあることと、「肥前国長崎県小城郡村誌」（明治一五年刊）の堤塘の項に「蓮堀・倉屋敷堀・蟻切堀（廿七人堀を合す）・久本蓮堀・三十堀・山領堀（一名百人堀）・馬洗堀」などの堀の名があることから、高田城を社の一帯に想定している。遠江の日子神社は千葉泰胤再建とされる。

「千葉氏関連遺跡について」（『中世の小城の歴史・文化と肥前千葉氏』）は、『荻府見聞俚言集』に「千葉之本館社刈ニ有り、四方二重堀也」とある記事を紹介する。いずれも社（ヶ里）説である。

本館があったとされる社ヶ里（社刈）は嘉瀬川右岸である。古代中世の国府津たる嘉瀬津よりもいくぶん上流の対岸になる。俊寛ら鹿ヶ谷事件処罰者は、往路は日向より島津庄、大隅国府を経て、鬼界ヶ島にながされた（長門本『平家物語』）。許された平康頼は帰路肥前国鹿瀬庄に上陸した。鬼界ヶ島は薩摩方とあるので、薩摩方→肥前国府→大宰府の径路をたどったのだろう。嘉瀬津の

北、野田東方に大きな蛇行痕跡があるが社の東方にも、小規模だがより古い時期ではないかと思われる蛇行痕跡がある。当時の社々里は蛇行する嘉瀬川流路に近接していた。

千葉氏の重要な菩提寺に先述の三岳寺がある。牛津江沿いの門前にあった。

小城郡の東方は嘉瀬川である。小城郡中央を牛津江川が流れる。牛津江川は小城市域を流れるが下流部で多久市域から流れてきた牛津川と牛津にて合流する。またその上流で門前川が合流する。

小城郡内の最重要港は合流地点の牛津である。牛尾（うしのお）城が貞和六年（1350）の伊万里文書に登場する。牛尾山には牛尾権現があったから、城郭が構えられやすかった（南北朝期の城郭は多く山岳寺院である）。牛津の後背地にあって、牛津の軍事掌握に不可欠であった。牛津に隣接する小島に橋津という通称地名がある（古庄秀樹氏調査）。潮汐の遡る限界は大潮と小潮で異なり、小潮でも潮がのぼる港（牛津）は、毎日満潮時での利用が可能である。大潮時の潮汐上昇地点は毎日の利用は不可能だが、領主の館はむしろこちらに設定される。

牛津川の門前・三岳寺（三寺）に「たち屋敷」という地名がある。そうした立地も潮位に関係がある。毎日使える港が牛津で、月に二回、数日の間、奥まで物資を運べる港が、門前の「たち屋敷」で、海と海に連動した潮汐作用による水上交通が、物資運搬のカギであった。そうした視点からの拠点形成過程が、初期の城や寺院の配置からもいえる。

長嶋庄の橘薩摩氏は六角川の高橋市場在家の地頭職を持っていた。六角川の場合、潮汐が遡上する限界点に潮見城とその館が、またそのわずかな手前に橘氏の鎌倉時代の館（渋江館、牛島館、中村館）が築かれている。おつぼ山の対岸である。潮見大日において大潮時の上昇地点である。下流高橋に市場ができて繁栄した。「いちほ（市場）高橋、に（荷）は牛津」とある。その市場は地頭が所有していた。

花嶋村にいた一族が村立てを行った史料が残されている。長嶋庄（現在の武雄市・北方町一帯）には地頭橘薩摩一族（庶子たち）が各村の地頭職を得ていた（以上は服部『景観にさぐる中世』）。

すると同じく小城郡を与えられた千葉氏も次第に所領が分割され、いくつかの村地頭職を得ていた可能性が考えられる。

中世に創立・再興されたとされる寺社は、小城町内では円通寺（臨済宗）・光勝寺（日蓮宗）・三岳寺（三つ寺）、須賀神社、三日月町内では勝妙寺（深川・貞治五年1366・日蓮宗）・修善院（本告・応安二年1369・日蓮宗）・日吉神社・堀江神社、牛津町内では清泉寺（臨済宗）・乙宮社・砥川八幡宮、芦刈

町内では宝泉寺（臨濟宗）・福田寺（曹洞宗）などとされている。このうち日蓮宗の寺院の拡大には下総中山法華経寺の外護者であった千葉一族の影響が大きかったと考えられる。

日蓮宗寺院の多くは光勝寺日親の関係者による創建とされる（修善院（応安二年、二俣妙暹寺（日蓮宗、応永三四年1427、日暹開基、大寺大妙寺（日蓮宗、応仁二年・1468、日調開基、三ヶ島ヶ里妙勝寺（応永三四年光勝寺一四世日巖開基 熊寄ヶ里妙円寺（永享三年1431日親の開基）、立石ヶ里妙長寺（応永二七年日耀開基）など）。千葉氏とその乳兄弟の一族がこうした村に入っていた様相を反映する。